『こころ』先生夫妻と乃木夫妻

Junko Higasa

夏目漱石作『こころ』は、当初『心』という題の短編集の一篇にする予定で、「乃木大将の殉死」をベースに構想した作品に「先生の遺書」という題を付けて新聞連載を始めた。しかし単行本にする時に「先生と私」「両親と私」「先生と遺書」という副題を付けて上・中・下と区切り、総括して人間に共通する「こころ」という題にした。この二つの単語を「と」でつなげる副題によって、漱石は「時代と個性」の違いをクローズアップさせた。「上」でこれから社会に出ようとする「私」という個人名を有さない現代青年代表と過去に生きる中年、「中」で両親と子供の年代差・地域差による国家観の違い、「下」で「先生」という個人名を有さない明治の精神とその死、というそれぞれの反比例関係が、この副題によってより一層明確になり、深く心に刻まれる。それは当時の読者に向けてというより、後世の読者に向けて与えられた副題かもしれない。「先生」は「私」に宛てた遺書に書く。

『私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないように、貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。或(あるい)は箇人(こじん)の有(も)って生まれた性格の相違と云った方が確(たしか)かも知れません。私は私の出来る限りこの不可思議な私というものを、貴方に解らせるように、今までの叙述で己れを尽した積りです』

この「明治の精神」への理解へ辿り着かせるために、漱石は若者が自ら進んで求めた未来を「先生と私」に描き、肉親よりも敬愛する他人という存在を「両親と私」の間で際立たせることによって、「先生と遺書」に含ませた乃木大将の死への批判を緩和した。すなわち人間の罪悪を幅広く捉え、一人の自己本位時代の青年の心の変化を時系列で追うことによって、より自然な形で時代的個人感の相違の穴を埋めたのである。それは「明治の精神」の尊厳を保ったまま切り離すという離れ業であった。

漱石は忘れていた「殉死」という言葉に深く心を動かされて「先生の遺書」を書いた。その中で「先生」と呼ばれる夫の名前は出てこないが、夫人の名前を「静」としている。そして乃木希典大将の夫人の名は「静子」である。

先生は『私は妻を残して行きます』と書いた。しかし乃木大将は妻と共に自刃した。そのことについても夫婦一体、夫婦別個性という時代観がよく現れている。しかしそれは単なる時代感覚の相違とは言えない。乃木夫妻には四人の子供があり、二人は夭折、もう二人は日露戦争で戦死。全ての子供を失った夫婦の落胆は大きかった。先生夫妻には子供はいない。即ちどちらも自分の世代で時代と個人の終焉を迎える。乃木大将は妻に宛てた遺書を用意していたので、一人で死ぬ覚悟であった。しかし妻の同行を許したのは、自分の死後、妻へ向かう批判と寂しさの苦痛を慮ったためだろう。先生が奥さんを残して逝けたのは、自分の過去を承知した「私」という存在に、奥さんの寂しさの緩和を託せたからではないだろうか。そこにも一つの心の作用がある。

死自体は壮絶である。そして「美」一字の死は「明治」で終わったといっても過言ではない。死ぬと決めて 35 年それを延ばさなければならなかった「明治の精神」を誰が責めることが出来ようか。たとえ新時勢にそぐわなかったとしても。 (2014.10.13)